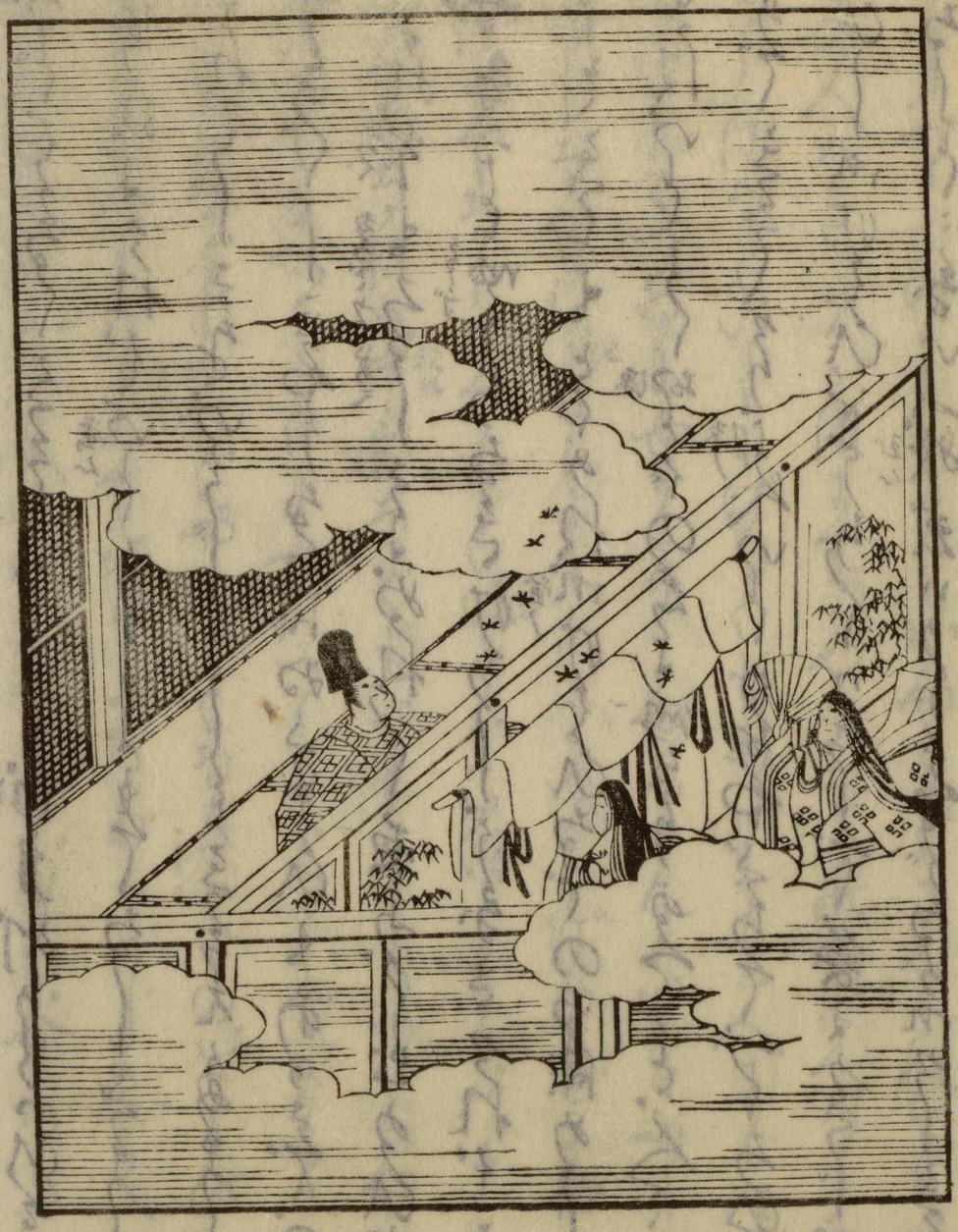
[V.25]

PL788
.4
.G4
1654
vol.25
Copy 1
Asian
Japan
Case

2004551302

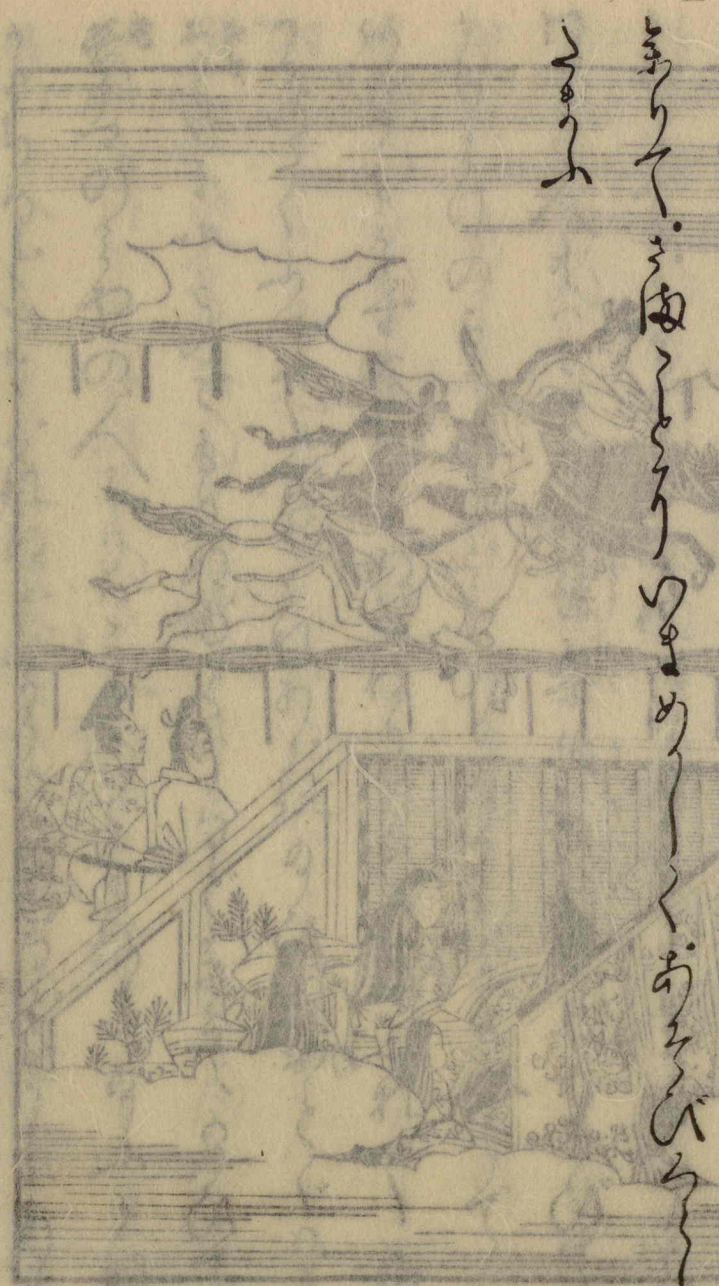
源氏廿六歳の六月のなかば

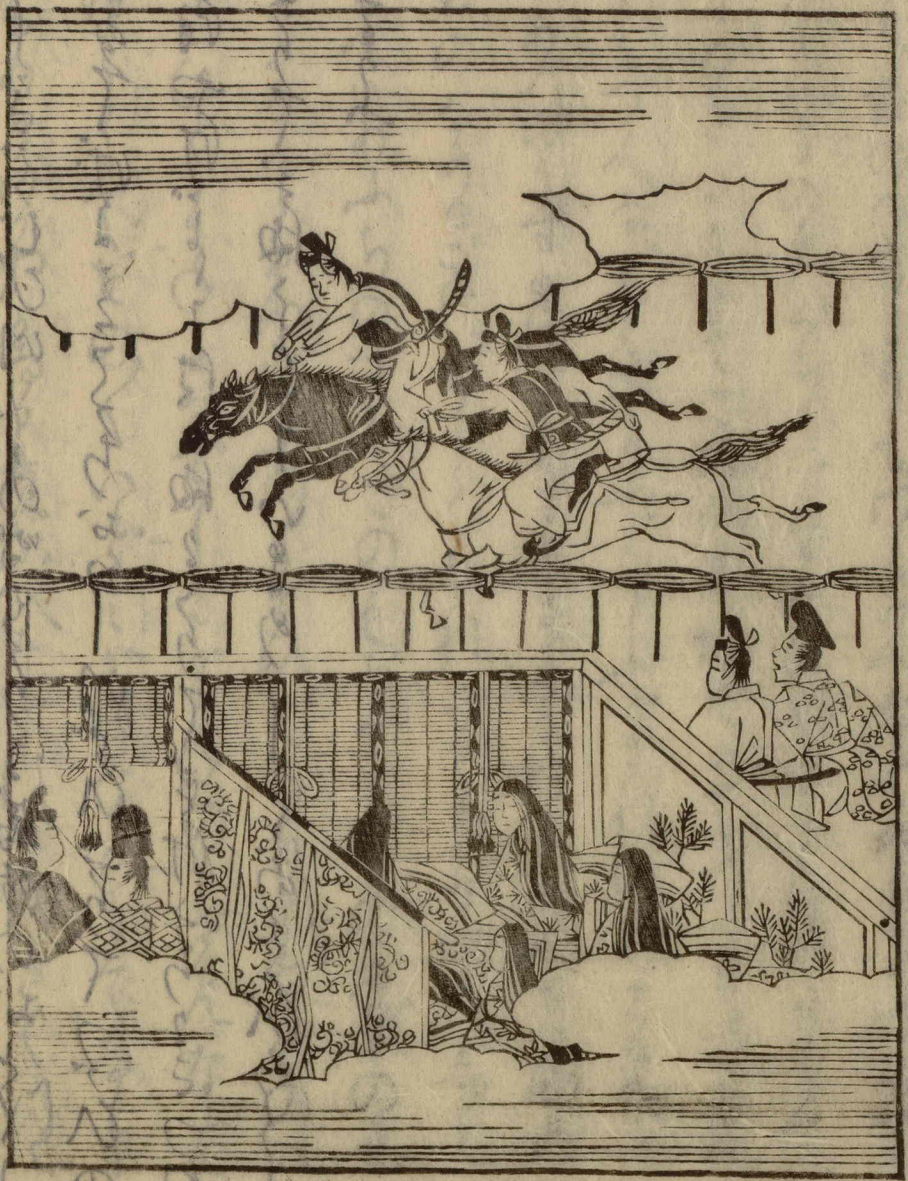
今はかくをもくしき程なる。よろづのどやかな。
おぼしたづめたる御(源ノ)有様なれば。これ三男さを給
へる人ぐ。さ海ぐまつけて。これもふさ海まさぐ
まり。こゞよそしうこそ。あら海は志ろてもそぐし
給。こいの姫(む)君こそいとおしく。さひの(源ノ好き人なり)はうなるおもひ
そひて。いつまをんとおぼしこゞろめれ。かれげん(はくしまうす)
か。うかりしさ海まは。なずらふべきけしきひなるほど。
かうすぢ(親子ノ分ニ)なりけても人のおもひよりまさらんべき
ことなるほど心(む)ひとりまおぼしいく。さ海ことより
うとましとさひまさて給。なるごとをも思しまり
まろかれよそひなれば。さ海かうざ海まさしあいめ



きしのぞきまひて、中将の夕ふの川かさのまけがひ
の川いでは、をのこども引つれて、物をべきさ海は
いひしをさる心しまへ、まだあるさ程まさるん
物ぞ、おやしく寝まは、けぎとまらずしのぶること
ともこのこころのさしつけて、とつしひ申し
まへば、をのづしことくしくなんあるを、ようい
しまへなど罪しまふ、むまだのおとぐいこなるの底
よりことをすほどをかしず、けうさ人ぞ、けさどのく
戸あけて申しこよや、左の川かさまいとよしある
官人おほかるころなり、をうくの蔵上人ありをとう
まじとの給へバ、物こんこと代いとおしとおも

へるも。基の此方よりもけらけべなど抱えるけらを
きてらうの戸ぐちに。こすあ紙やかまかけけらして。
いまめきたるすそごの此本帳だとてけらしけらは
しもづへなどさ夜よふ。さうぶがきれのあらん。ふ
さあいのうすもれくかぐこそたるけらもべぞ。西乃
基のなめるこれましくなれたるかぐり四人。志も
けりへはあふちのすそごのもなでしこの若紫の色
しらるかしさぬけふのよそひだなり。となるのは
うさひとくきのまなでしこがきのかぐれなど。
おほとりてをのくいどこがほなるもてなし
三家あり。けりやかなる吾上べ上などはめ紙とそけく





池

せいなまのあやめもなしぬとあれど舎人(とねり)どもも
さへえんなるさうぞくとつくりて。おもをちげくりて
まどいしつどところぞおもしろかりし。南の町も
とりそて。むかしくれば。おもふこともやうきむ
わかき人だへこそかり。打毬楽納蘇利などあそびて。
うちまけのらんざうどものこゝろも。よるへもて行。
何ぞもえさず客なくてぬ。よそりどもの縁なれば沼
つかうまつりて。人びとなれおどれのひめ。おもしろいで
あるゝよれものでありぬ。地がうちなどこえておもひて。
世中のこゝやの人よりはこちくまみしのふかれ。
きくうちなどいはざられねど。よろづ気色などよしある

あいぎやうつきたる君也。思ひてこゝのひつやうしと
いへどれこそあれとのまふ。れ（花ちる詞）などうとうしこそも
のしまへど。ねびまさりてぞこしこまひける。年
比かくありきさず。ひたり。むつびこそしこまふと字
こゝれど。むかしのうちひたりまてほのこなりし後。
なぼつるしかし。いとよくこそうちなどねび
まさりぬひまれ。そちの（雲ノ才之）こそよくもれしぬふめ
れど。けそひなとりて。なほ君の事父まぞもれし
ぬひけるとの給へば。ふく（ほん）こまりぬひてりなるとと
なぼきど。ほとゝこそ。なをあるとばよしともあしも
かけ給はず。人（地）のうへとなんつけ。なとし先ぞ後のこ

そのこ(花ちる)ゆもすきめぬ草と名まして家行の
おやめはしやひきつるとおほせらるゝ罪しなふ。なるゝ
どりのことまもあしほど。(添)養とおぼしたる
まほどりまうげをなしづるつゝご(添)ゆもいけり
おやめまひきつるべき。(比)あひたちなきけことにも
なりや。(添詞)朝夕のへだてあるやうなれど。うくて見
なりいろやすくこそあれと。(比)こちあれどなれど。
のどやかなりする人(花ちる)ざ(添)ゆなれば。しげまりて罪
なしなふ。(花ちるノ)ゆるとばゆづり(添)罪なて。(比)平帳引へだてて
おほとのごもる。(花ちるノ添)けぢうくなどあしんすぢをばいと
まげなるべきことに。おもひもなれもてきそ

れど、さしもあしじやとの給へば、げにいけるを
なれたる人や、さ面ぐるさしらせ給ふん、あぐいと
まことのことこそおもひ給へられれとて、硯を
としやすまへば、こちなくもふるしおとしてげる氏
神代よりせるあることを、しるしときけるなるを、日
本紀などいふじうるそばぞし、これしまこそこちく
志をくらしきことにあしめとてけひ給、その人志
うへとて、おりのまゝにいひ出ることこそなけれ、
よきもあしきもせるかる人の有様のこうにもあら
ぞ、すゝもあまることを、後の世にもいひつゝへさせ
ぞ、ほしきかしぐを、心にこめぐるて、いひなさ

もてゆけばひとつむまゝありて菩提と煩悩との
へだたりなん。この人のよさあしさぞうりのことは
うちりけり。よくいへばすべてなるごとも。世なし
うしずなりぬや。抽説をいとけざとのことはのなひ
なしけ。さてうらふることのなるは。まろかやうは
ぢほうなるしれものゝ抽説はありやいこじうけど
とき抽の姫君も。此こころのやうはつれなく。そこなば
めさしこころは世なるあしじれ。いざこゞひなさ抽説
よして。世はつくへさきんとさしよりてきこしなへば
かれとひき入て。さしずともかくめづらかなることは。
世説はこそは成行ぬべかれとの給へば。

ことづけて。抽従ハ挙がたくおぼしたり。こまれく
抽従の恩まてあるを。いとよくうさたる恩かれとて
ゆるんぜ。ちいさき女恋のなる心もなくて。ひるゆ
しゆへる事を。昔の有さ後おぼし出て。女恋をみ
なふ。かゝるゆゝハどちぐるいうまざれたりかん。まろ
こそ程たるしまさいべく。心のどけさハ人に似ざり
けれとこそて出なへり。げにゑぐひおぼしぬこと
どもハこれこゝあり先なへりけるし。姫恋の此前
まて。此世なれたる抽従など。なよこそをなふそ。
みそか心つきたる抽のむすめなどは。おしとなは
わしゆどかゝることよりハありかるとこゝなれ結

してかしづきしぞと。親(弟)のしまぎ法人。しひやら
なくこそいとをしかれ。げにさいへど。其人のけりひ
よとこえたるハかひあり。おもぐしかし。玄葉志
かぎりまばゆくほめをきたるに。しいでたるわざ。
いひ出たることの中に。げにとこえきしゆること
なさ。いとこいおとりするわざや。とべてよろぬ人に。
いかで人ほめさせじなと。たゞこの姫(姫ノ)君のてんつれ
なふまじくと。よろげに覚しのたまふ。まくはく乃
もしぎたなさ。昔物語もおほかるを。心えに心づき
なしとおぼ(源ノ)をば。いとじくえりつゝなん。かさとて
の人さを。絵(色)などにもかゝせ給ける。中(夕)将(地)のさうぞ。

れば、夕の人のもろともにあそびて、そぐし志とし
月のまづさひ出るれば、ひゐなれとれ、こゝやげ
くへいとよくしまて、おなしくにうちしほられ
なひかり、さも有ぬべきあたりにはちなしゞとも、
のるまひ、ふるゝはあまるあれど、これミクくべくも
志れさず、さゝかるにあるどかはこざらんと、心とまる
ぬべきをも志ゐてなをざりゞとに志なして、なほ
かれこどりの袖をこしなをして志ゞなと、ぞふこうろ
のこぞやんゞとなきふしにもとまるけり、あか
がちにあるどかくづらひまどもぐ、ともふるくかくに、
ゆゑしなひもしけべかれど、つくしとさひし

出んやときてしりたれば、女（以詞）ごの人の子は女ことに
おきくなし。うくいなることまうあしんなどこ（地）の
ごろぞおぼしのゆふなるなる

69038
6AP78